花粉症候群の流行に対する　考察

高天原研究所

近年、アレルギー性鼻炎が　大流行である。

春のスギ花粉、秋のブタクサ花粉をアレルゲンとする症例は　最たる物だといえる。さらに、アレルギーでないと　文化的人間でないような風潮も加わり、社会的現象ともなっている。

この病に対し　某耳鼻咽喉科看護婦の証言を元に考察を加えてみた。

証言

某耳鼻咽喉科の詳細は　残念ながら公表できない。私設の総合病院クラスの規模である。

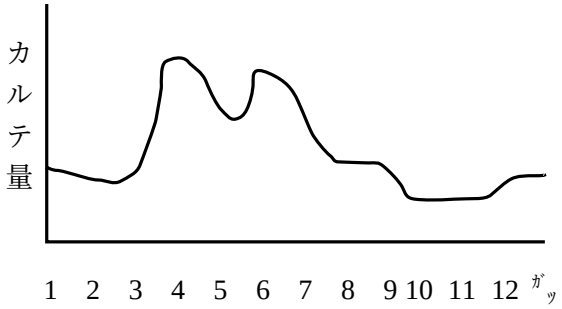
ここの　耳鼻咽喉科看護婦から　次のような証言を　引き得た。

証言　1　春先はカルテ量が　急増する。

証言　2　患者が増えると　院内従事者も発症してしまう。

証言　3　通院、加療しても症状の顕著な改善が　みられない。

図　1



保健申告数調べ

図１のカルテ量より　患者数の急峻な増加と証言３にある　治癒しにくい現状がでている。

又、感冒などの　患者の減少時期に　アレルギー患者が増えることから　人為的な作用すら感じられる。

陰謀

当初、証言２と証言３の関係について　院内従事者と　患者のピンポン感染と考えていた。

ピンポン感染プロセス

1．患者の鼻水、汗等に抗体物質が含まれている。
2．院内従事者が　患者の抗体物質をアレルゲンとする　アレルギーを　起す。
3．院内従事者の　鼻水、汗等に含まれる抗体物質は　患者の　アレルゲン類似構造を持つ。
4．患者は　院内従事者の　抗体物質に対して　アレルギーを　起す。

このプロセスの　媒介として　診察券、貨幣等、多数考えられる。

しかし、この説は　患者、院内従事者双方に対して行った掻皮法によるアレルゲンテストにおいて誤説だと発覚した。患者、院内従事者共同じアレルゲンに対しての　アレルギーだったのである。

陽性　人数	患者　100	院内者　20
スギ	６３	１２
マツ	９	２
ｵｵｱﾜｶﾞｴﾘ	２３	８
ブタクサ	１９	４
カナムグラ	３	０

この検査時点で、オオアワガエリの花粉をアレルゲンとする人が多いのは疑問視される。オオアワガエリの花粉飛沫は　７月頃であるので１・２ヵ月早いのである。検査時点でオオアワガエリの花粉があること　なおかつアレルギーを引き起こす程の量に達しているのは明らかに、おかしい。そこで　プレパラートにグリセリンを塗布し　６０分間放置する方法で、花粉採集を行った。

Ａ．院内待合室　　Ｂ．院内診療室
Ｃ．院外駐車場　　Ｄ．病院　屋上
（地上高20m）

採集花粉数	A	B	C	D
スギ	127	90	45	62
マツ	9	7	5	3
ｵｵｱﾜｶﾞｴﾘ	84	72	0	2
ブタクサ	1	0	0	3
カナムグラ	0	0	2	0

上表の通り　院内では異常にスギ花粉、及びオオアワガエリ花粉がおおいのである。

この実験の結果から、私感ながら当院医師を信用できなくなってしまった。資本主義下での金儲医者の仕業としか思えない。大方、出入のプロパーあたりに目くばせして　アレルゲンサンプルでも手にいれ　待合室、診療室等にまいてまわっているに　違いない。

同時に　証言２、証言３の説明としても充分納得の行く　実験結果である。

もはや　アレルギー性鼻炎の流行の裏には耳鼻咽喉科の陰謀が　あるとみられる。

アレルギー性鼻炎は　耳鼻咽喉科では治らないし　又、多くの患者は　自ら実感しているはすである。医者の下劣な手練手管に　ひっかかっては　ならないのである。

治療

現在一般に行われているアレルギー性鼻炎に対する治療は　症状の緩和という意味において抗ヒスタミン剤、ステロイド剤等が用いられている。しかし根本的解決には到ってはいない。

ぜんそく発作鎮納剤を　発症時期より数ヵ月前から投薬し　予防的成果をあげる方法も有力視できる。

一案として　三叉神経のブロック術を　提案する。神経のブロック術はリュウマチ、神経痛などの痛みの軽減、てんかんの治療等　充分実用の域にはいっている。三叉神経のブロック術は　最初のアレルギー反応によって　鼻粘膜の腫張、水性鼻漏、流涙などが起きても　それらが補助的要因となって　鼻粘膜の過敏な状態等アレルギー反応が増大する方向へ向けないのが最大の目的である。以下に　臨床４６例に適用した結果を示す。

該当人数	臨床４６例
ならなかった	１７
軽かった	２０
かわらない	９

かなりの数の患者においては　まったくアレルギーを　感じなかった様であるし、全体数の８０％において症状の軽減以上の効果が得られた。又、効果を訴えなかった患者に対しても血中ヒスタミン量で　平均３０％の減少が認られた。我々は、アレルギー性鼻炎に対して　有効な手段を　手に入れたといえるだろう。

以上、アレルギー性鼻炎に対する考察と　有効な新治療法を　紹介した。

完全な免疫停止療法としてエイズウイルスの使用も考えられるが　まだ確立されていない。しかし　アレルギーは生きている証でもある。

この論文を　鼻水の止まらない人々に。